



日本ナレッジ・マネジメント学会
KMSJ Knowledge Management Society of Japan



日本ナレッジ・マネジメント学会

目まぐるしい環境やニーズの変化に対応するため人間のナレッジをいかに有効に役立てていくか理論体系を確立し、その体系について世界各国と交流を深めていくことを目的としています。

日本ナレッジ・マネジメント学会 第 25 回年次大会 開催レポート

2022 年 11 月 27 日（日）、日本ナレッジ・マネジメント学会(KMSJ) 第 25 回年次大会が開催されました。

◆◆◆大会世話人からのご挨拶

このたびの年次大会は第 25 回という節目にふさわしい大会テーマを決めるところからスタートした。ほぼ毎月の開催となった理事会では、さまざまな角度からの検討を行い、原点を問う問いを立てることが大会テーマとしてふさわしいという結論にいたった。そして、知を創ることで解くことのできる課題とは何かをテーマとすることで一致し、大会テーマを「個人、家族、チーム、組織、コミュニティ、社会、そして地球～ 知識創造で解くべき課題設定を問い直す～」とし、以下のように大会テーマの背景と目的を設定した。

大会テーマの背景と目的（※編集注 事前プログラムのままの表現にて再掲しております）

VUCA の世界に生きる私たちは、日々、様々な問題や課題に直面しています。それらは個人的なものから社会、国、地球レベルまで、空間的、時間的な多様性を持っています。たとえば、COVID-19 の感染拡大は、日常の働くことと生きることが密接につながっていることを再認識するきっかけとなりました。ロシアとウクライナの戦争は、食糧やエネルギーの分野で世界的に影響を与えています。こうした問題や課題に対して、日本ナレッジ・マネジメント学会では、改めて知識創造を鍵に、解くべき課題は何かを問い、課題を設定して、解決に向けた道筋を探りたいと考えています。みなさまと自由闊達な意見交換ができることを楽しみにしています。

このテーマにふさわしい基調講演は何かを話し合う中で鍵となったのが「コミュニティ」というワードである。ナレッジ・マネジメントには「実践共同体（コミュニティ・オブ・プラクティス）」という研究分野があり、この分野での研究から得られた成果や知見が多様な人々が多種多層の関係性を構築することが求められている現在の課題に対して解決に向けた道筋を提供することを期待し、「実践共同体」を軸にして、基調講演とパネルディスカッションを行うこととした。

大会の午前中に行われた基調講演とパネルディスカッションの詳細は「パネルディスカッション」のレポートを参照いただきたいが、結論としては、人々の価値観や常識、社会や経済の仕組みに変化が起きている現在においては、実践共同体の研究と実践を今後のナレッジ・マネジメントの軸に加え、研究と実践の対象をさらに広げていくべきという結論にいたった。

午後は、各研究部会からの活動報告に続き、会員から4つの自由論題の発表を行った。いずれも、ナレッジ・マネジメントの研究と実践における最新の課題に着目したテーマであり、今後の一層の研究と実践が期待される内容であった。

最後に、第25回年次大会にご参加を頂いた皆様とともに、なんらかのご都合によりご参加頂けなかった皆様に、日本ナレッジ・マネジメント学会の活動へのご支援に感謝いたします。また、大会運営に際し、特に総務会計アドミ、広報アドミの皆様には事前の準備から当日の運営まで対応いただきありがとうございました。深く感謝申し上げます。

西原(廣瀬) 文乃（第25回学会年次大会 世話人代表）

◆◆◆ 概要報告 日本ナレッジ・マネジメント学会第25回年次大会

大会テーマ： 個人、家族、チーム、組織、コミュニティ、社会、そして地球
～知識創造で解くべき課題設定を問い直す～

大会テーマの背景と目的

VUCAの世界に生きる私たちは、日々、様々な問題や課題に直面しています。それらは個人的なものから社会、国、地球レベルまで、空間的、時間的な多様性を持っています。たとえば、COVID-19の感染拡大は、日常の働くことと生きることが密接につながっていることを再認識するきっかけとなりました。ロシアとウクライナの戦争は、食糧やエネルギーの分野で世界的に影響を与えています。こうした問題や課題に対して、日本ナレッジ・マネジメント学会では、改めて知識創造を鍵に、解くべき課題は何かを問い、課題を設定して、解決に向けた道筋を探りたいと考えています。みなさまと自由闊達な意見交換ができることを楽しみにしています。

年次大会のプログラム

実施方式： Zoom オンラインで開催します。

【午前の部】

9:00 Zoom 開場

9：20 大会開始

開会挨拶： 一條和生氏（本学会会長）

第1部：講演

司会進行 西原(廣瀬) 文乃氏（本学会理事・大会世話人代表）

9：30-10：30

基調講演： 松本 雄一氏（関西学院大学教授）

テーマ：「実践共同体から見るナレッジ・マネジメントの未来」

第2部：パネルディスカッション

10：30～11：55

テーマ：「個人、家族、チーム、組織、コミュニティ、社会、そして地球の各レベルでの知識創造の最先端の課題は？」

司会・コメンテータ： 野村 恭彦氏（本年次大会リーダー、Slow Innovation 代表 / KIT 虎ノ門大学院教授、学会理事）

パネリスト：

松本 雄一氏（関西学院大学教授）、

伊藤 圭之氏（京都市行財政局総務部総務課担当係長、一般社団法人アソボロジー代表理事）、

伊藤 武志氏（大阪大学教授、学会理事）、

筒井 万理子氏（近畿大学教授、学会理事）、

西原(廣瀬) 文乃氏（立教大学准教授、学会理事）、

野村 恭彦氏（金沢工業大学虎ノ門大学大学院教授、学会理事）

※Garden Lab Kyoto よりオンライン発信で行います。会員の皆様とは、チャットによる質疑応答、参加者全員参加でインタラクティブに行います。

集合写真撮影

昼休み（11：55-12：55）

（昼休みはマイクミュートをはずして（チャットも可）で交流）

【午後の部】

研究部会の活動報告（13：00-14：30）

15分質疑含む（*6研究部会）全て本学会理事かつ部会長

① 東海部会/栗本 英和氏

② 知の創造研究部会/植木 英雄氏

③ 実践ナレッジイノベーション研究部会/西原(廣瀬) 文乃氏

④ SDGs 研究部会/高山 千弘氏

- ⑤ 新産業革命研究部会/田原 祐子氏
- ⑥ ISO 等標準化研究部会/齋藤 稔氏

研究発表（自由論題）（20分報告+10分質疑）

トラック A :

研究発表 1（14:40-15:10）

論題：「都市の脆弱性とナレッジ：ソーシャルアントレプレナーシップの視点から」

報告者：岡田 依里氏（Boston Cancer Policy Institute, Inc, Senior Academic Fellow、学会理事）

司会・コメンテーター：未定

研究発表 2（15:15-15:45）

論題：「メタバース空間における協働過程の発話コミュニケーション解析」

報告者：栗本 英和氏（名古屋大学未来社会創造機構、学会理事）、

西山 直宏氏・江間 巧樹氏（名古屋大学情報学部）、

平子 友博氏・上井 元氏（名古屋大学大学院環境学研究科）、

西原(廣瀬) 文乃氏（立教大学経営学部、学会理事）

司会・コメンテーター：加藤 鴻介氏（学会理事）

トラック B

研究発表 1（14:40-15:10）

論題：「音声つばやきシステムを用いた漁船機関保守のナレッジ・マネジメント」

報告者：井上杜太郎氏（北陸先端科学技術大学院知識科学研究科、学会会員）

コメンテーター：西中 美和氏（香川大学大学院地域マネジメント研究科教授、学会会員）

研究発表 2（15:15-15:45）

論題：「後進層が期待するベテラン経験知の価値とその移転－IT企業A社SE部門におけるベテラン層と後進層による知の協創－」

報告者：細野 一雄氏（学会会員）

司会・コメンテーター：植木 英雄氏（学会理事・研究部会長）

パネルディスカッションのクロージングダイアログ（16:00～17:00）

閉会 17:00

◆◆◆大会ハイライト

すべてのプログラムにおいてたいへん充実した発表がなされた中で（演者の皆様に深謝致します）、本レポートでは、幾つかのプログラムについて特出しハイライトします。

トラック A :

研究発表 1 (14 : 40-15:10)

論題 : 「都市の脆弱性とナレッジ : ソーシャルアントレプレナーシップの視点から」

報告者 : 岡田 依里氏 (Boston Cancer Policy Institute, Inc, Senior Academic Fellow)

司会・コメンテーター : 高山さん (調整中)

Ellie Okada Adjunct Professor of Strategy Keck Graduate Institute Senior Academic Fellow

Boston Cancer Policy Institute 元横浜国立大学教授

タイトル : 都市の脆弱性とナレッジ : ソーシャルアントレプレナーシップの視点 から

ソーシャルアントレプレナーシップ (以下 SE) は資源、ロイヤルティ、時間をめぐり競争のなかでアイデアを実践に変換する発見のメカニズムである (Mulgan, 2007)。先行研究に従い本報告は SE を、「政府が新たな公共財の需要を満たすことのできない領域をそのドメインとし、社会的価値を付加すべく戦略的に機会を創出する」と定義する (Dees, d.n.; Mulgan, 2007; Nicholls & Cho, 2007)。従来、社会企業 (social enterprise) が社会的課題と効率性をビジネスモデルにより両立させる、画期的取り組みとされた。しかし社会企業は欧米では、正当性と同一化の圧力のもとで、受益者に対する便益が二次的となる危険が指摘されている。その中で研究者や政策当局等は SE がそうした圧力を克服、都市の貧困や暴力等の問題を解決することを期待する。しかし、その圧力を克服するプロセスが必ずしも十分に研究されていなかった。本報告はこの研究課題に対してオーストリア学派と構造化の視点を理論的出発点とし、アメリカの事例を対象としてアブタクションの方法論によりアプローチする。結果として SE が貧困により変容した受益者の認知とナレッジの創出過程を変換することを指摘する

トラック B

研究発表 1 (14 : 40-15:10)

論題 : 「音声つばやきシステムを用いた漁船機関保守のナレッジ・マネジメント」

報告者 : 井上 杜太郎氏 (北陸先端科学技術大学院 JAIST)

司会・コメンテーター : 西中 美和氏 (香川大学大学院教授)

発表概要 :

機器の保守点検に関するナレッジマネジメントは、主に製造ラインの設備や発電所の機器など専門の保守点検者のナレッジマネジメントであった。しかし、漁船機関保守においては、航海中の点検者（船上機関員）とドックにおける保守担当者（陸上保守担当者）は、時間も場所も異なるため、船上機関員と陸上保守担当者の知識共有は大きな課題であった。そこで、船上機関員の気づきをその場で音声と写真で収集し、陸上保守担当者との知識共有を促進するシステムを開発し、実際の漁船で試行評価を行った。その結果、時間も場所も異なる状況において、現場の文脈とともに記録された気づき情報を用いてワークショップを行うことで、有効な知識共有が行えることが明らかになった。

トラック A :

研究発表 2 (15 : 15-15:45)

論題:メタバース空間における協働過程の発話コミュニケーション解析

発表概要:名古屋大学・大学院共通科目として開講している、メタバース空間での社会価値創造を目的としたワークショップに対して、協働過程における発話コミュニケーションの解析を行った。

有機的な意思疎通や合意形成につながるような発話コミュニケーションの形態に着目し、チーム活動でのコミュニケーションの形態変化を表象しうる観点とその指標を抽出した。

これらの指標を用いて、チーム活動を Multi-disciplinary Team, Inter-disciplinary Team, Trans-disciplinary Team の3つのチーム形態に類型化することで、単なる作業の役割分担から、目的を共有し、それを目指すコミュニティ形成に至る動的過程で発生する形態変化を可視化した。

その結果、協働する目標が単純な場合の活動と比べて、SDGs への取組のような正解が唯一でなく、多種多様な実践と創意工夫を要する課題解決や価値創造を目指す場合の活動では、Inter-disciplinary あるいは Trans-disciplinary なコミュニケーション形態を有していることが分かった。

報告者氏名

栗本英和 (名古屋大学未来社会創造機構) ,
西山直宏・江間巧樹 (名古屋大学情報学部) ,
平子友博・上井 元 (名古屋大学大学院環境学研究科) ,
西原文乃 (立教大学経営学部)

トラック B:

研究発表 2 (15 : 15-15:45)

論題:「後進層が期待するベテラン経験知の価値とその移転

－ I T 企業 A 社 S E 部門におけるベテラン層と後進層による知の協創－」

報告者: 細野 一雄氏 (JAIST 知識科学博士)

司会・コメンテーター: 植木 英雄氏 (本学会理事・研究部会長)

ベテラン層が有する経験知を後進層に移転し組織として継承することは企業の技術力維持向上のための重要な施策である。

IT 業界 SE（システムエンジニアリング）部門はプロジェクト型組織でビジネスをしていることから技術が変化しても適用できる経験知が求められる。多忙だったことから経験知の大半はベテラン層の個人知として内在したまま組織的には暗黙知となっている。

経験知の中でも有益かどうかは受け手である後進層ならば判断できるのではないだろうか。そこで長年ナレッジ・マネジメント活動を実践しシニア層の活用施策を開始した IT 企業 A 社 SE 部門を調査した。

経験知を 4 つ（専門知、思考スキル、行動スキル、自己管理）の種類に分類できること、後進層が認識している受け取り方とベテラン層が認識している伝え方には認識ギャップが生じやすいこと、後進層とベテラン層のお互いの信頼関係が最も重要な因子であり、後進層が課題解決に向けた知の創造をベテラン層が支援する協創スタイルによってオンデマンドで後進層に知が移転する方法が用いられていること、などが確認された。

後輩に自己の経験知を伝えたい他の同様な技術分野のベテラン層の参考になりつと考える。

=====

なお、講演要旨ならびに資料は、公開可能なものについてのみ当学会 HP の学会員専用ページにて閲覧頂けるよう、順次公開して参ります。公開可否の確認に時間を要しており申し訳ありません。

公開後の、資料のお取り扱いにつきましてはご注意ください、くれぐれもお願い申し上げます。

※当日の投影資料と、こちらに紹介する公開資料には一部差異がある場合がございます。

◆◆◆ パネルディスカッションのレポート

パネルディスカッションは、基調講演の松本 雄一氏（関西学院大学教授）に加え、筒井 万理子理事（近畿大学教授）、西原（廣瀬）文乃理事（立教大学准教授）、伊藤 武志理事（大阪大学教授）、野村 恭彦理事（金沢工業大学虎ノ門大学院教授）そして特別ゲストの伊藤 圭之氏（京都市行財政局）の 6 名で行われた。

冒頭の基調講演で、松本氏は、社会的課題解決には、専門家以外の多様な市民が当事者として参加する必要があることを指摘。その上で、多様なステイクホルダー（学術研究者、非学術参加者）の参加を前提とする実践共同体を「トランスディシプリナリー（実学集合型）実践共同体（Transdisciplinary Communities of Practice）」となづけ、その重要性を訴えた。

続いて筒井理事は、実践共同体研究の統計調査を用いて、経営学領域における「実践共同体」「学習」「知識創造」への近年の関心の高まりを示したうえで、学会として実践共同体研究に今後力を入れるべきと提案した。そして伊藤武志理事は ESG を背景に、企業が積極的に SDGs 達成に取り組む状況を報告し、この分野での知識創造の必要性を示した。さらに西原理事は、知識創造のこれからの課題設定は「創造的な人材の育成(再生)と、創造的な環境の整備」であるとした。そしてゲストの京都市伊藤圭之氏は、市民参加推進計画や市民協働ファシリテーター育成の事例を報告し、社会課題を市民力で解決するための知識創造研究への期待を示した。

最後に大会リーダーの野村理事は、今回の大会テーマでもある「個人、家族、チーム、組織、コミュニティ、社会、そして地球の各レベルでの知識創造の最先端の課題は？」という問いを改めて確認した。そのうえでパネラー全員での議論が行われ、知識創造の重要課題が「企業のイノベーション」から「社会イノベーション」へ、「組織課題」から「市民協働」へと広がってきたことを議論した。さらにその研究アプローチとして、「トランスディシプリナリー実践共同体」や「スロー時代の知識創造」へと広がることへの期待が話し合われた。

野村恭彦

※お昼休みに撮影した集合写真を、この素晴らしい大会の記録として共有いたします。ハイタッチ！



◆◆◆編集後記

学会員の皆様、そしてこのレポートをお読みくださっている皆様におかれましては、益々ご健勝のことと拝察いたします。

今年度の年次大会も盛況、50 数名のご参加を得て成功裏に幕を閉じることができて喜ばしく思っております。ご参加の皆様のご理解とご協力に心からの御礼を申し上げます。今回の大会は私どもにとって四半世紀の節目であり、大きな意味がございました。ナレッジマネジメントの来し方行く末を照らすものであるべきと考えました。開幕冒頭での、当学会会長 一條和生氏からの皆様へのご挨拶は、KM を志す皆様への、グローバルな視野での勇気付けのメッセージであったのではないかと考えます。

本大会は、大会リーダーとして野村恭彦氏、大会世話人代表として西原文乃氏の尽力により運営されました。

講演者の皆様、素晴らしい講演を賜り、ありがとうございました。

各プログラムに参加頂いた聴講者の皆様に、何らかのお気づきをもたらすことができましたら、幸甚に思います。
社会情勢を鑑み、今回もオンラインでの開催となりましたが、皆様と対面でお会い出来る日を心待ちにしつつ。

以上をもちまして、日本ナレッジ・マネジメント学会（KMSJ） 第 25 回年次大会の開催レポートとさせていただきます。

編集担当：KMSJ 広報アドミチーム

編集後記文責：広報アドミチーム 清水美也子

発行：日本ナレッジ・マネジメント学会（KMSJ）会長 一條和生

